大谷學會秋期公開講演要旨

創造性の倫理

阿部行人

ベルジャエフはその著「人間の運命」に於て倫理を三つの類型に分けている。掟の倫理・贖罪の倫理・創造性の倫理がこれである。先ず第一の掟の倫理は、本質的に社會的である。即ち其處では、社會が道德法の監督者であり、道德的評價の主體は社會であつて個人ではない。從つてそれは、平均の人間の、人間集團の生活を基礎ずけ、共通のレベルの上に立つが故に、個體的なもの・人格的なものに對しては無關心であり、人間の內的な生について注意を拂わない。そうした掟の倫理は、單に倫理を民衆による法と同一視するところにあるばかりではなくて、哲學的な掟の倫理もあり得る。例えばカントの倫理やバリサイの禁欲主義のうちにもかかる傾向はある樣に思われる。

ベルジャエフは固より掟の倫理を否定しようとするのではない。それを否定することは畢竟人間の社會性を否定することになるからである。むしろ我々は、それが個人を暴力や不正から守るところにその意義を見出さねばならぬ。併しそれと共に我々はこの倫理が個人の道德生活の內奧を透視せず、人間の創造的個性を考慮しない點に氣付かねばならない。それは常に人間を自由へではなくて奴隷へと追遣り、掟から逸脫する者についての處罰の力に對しては樂觀的態度をとる。かかる態度に於て最も根本的なものは、神の助けを不必要なものとすることであるとベルジャエフは考えている。

そこで次の贖罪の倫理が問題となる。贖いとは何よりも先ず自由にすることである。人間は自由な存在であるが、しかし自らの非合理的な自由（恣意）を征服する力を持たない。それ故に人間は自由であるが故に惡から逃れられない。否寧ろ根源的な自由は惡と結びついている。そうして自由があり惡が存在するからこそ神が存在せねばならず、また人間は神に對して和解せねばならぬのである。この倫理は、人間の運命を頒ち持つ神との出逢い——即ち一切の人類の究極の救濟に對する信念に基いている。

併し贖罪の倫理は眞の意味での倫理とは言えぬ。何故なら此の倫理は人間の努力によつて實現されるのではなくて、キリストによつて始めて實現されて行くものだからである。かくして我々は最後の創造性の倫理に導かれる。

創造性の倫理は人格的活動の倫理、道德的エネルギーの倫理であり、人間の奴隷化からの解放の倫理である。それは、ユニークなもの・個的なものを肯定する。自らの凡ゆる行爲に於て個體的であること、換言すれば常に具體的な獨自な自らであること、人格であること、そしてそれを裏切らないこと——これがその絕對的命法である。そうして自らであることとは、自らについての神のイデアの實現に外ならない。神のイメージとしての人格は、常にベルジャエフに於ける倫理學の中心なのである。

ベーメは對立する二つの原理の上に神の顯示を考え、シェリングも同樣に、相反する原理の抗爭のうちに人格性の形成を考えたが、ベルジャエフに於ても、そうした思想傾向は承繼がれていると考えてよい。というのは、創造性の倫理は鬪爭と觀想との倫理であるからである。有と無、レアールなものとイデアールなものとの對立鬪爭がなければ凡ては創造的とは言えぬであろう。かかる動的な面とともに、今一つ觀想とは、靜的な面、神をみつめること、精神界の神祕的なコンテンプレーションに外ならない。かかる觀想に於て創造を考えるのも、やはりベーメの「見ることが生むことである」という根本的な考え方に影響されていると言えよう。

かくしてベルジャエフの倫理は、一方あくまで客觀化されざる人格の自由性とエネルギーに基いており、他方に於ては神祕主義的な傾向を深く湛えて、神の創造に聯なるところの、永遠性に關係する創造的な活動の倫理であるといつて差支ないと思う。

一念三千說の形成

安藤俊雄

止觀輔行や止觀搜要記が一念三千說を以て摩訶止觀のみの獨說であると述べたのに端を發して、古來天台學界に玄句三千といふ一論題を生み、中日兩國でしばしば論議の對象となつたことは周知の如くである。この議論は問題を三大部の範圍に限定してゐるが、もつと廣く天台大師の講錄や撰述の全體を考察すべきであつて、湛然が一念三千說を少しも說いておらぬと斷定した初期をも檢討する必要があらう。

けれどもその場合一念三千說の文と義の二面から考察しなければならない。文から見るとき三大部の最初に說かれた法華文句の中で頻繁に行はれてゐる計算法の事例、すなはち經文に出る種々の數目を解釋するために十界・十如・八正道・定慧などの名目が縱橫自在に應用されてゐる事實、及び摩訶止觀の直前に說かれた法華玄義や直後に說かれた維摩經の前玄及び後玄に於ては、十乘觀法の不思議境を說明するに當つて、一念三千ではなく、圓敎の四諦・三諦・二諦・一諦・十二因緣等を擧げており、これらは何れも法華玄義の境妙段で說かれてゐる妙境であるといふ事實などを考慮すべきである。すなはち三大部を說いた天台大師の晩年に於てさえ、一念三千は必ずしも不思議境の唯一の內容規定であつたわけではないことが想像される。もし一念三千が不思議境の內容を表示する唯一の規定であるとすれば、法華玄義の三法妙を說くところで殆んど完全に近い一念三千說を述べ、肝腎の十乘觀法の槪要を說くところで不思議境を一實四諦などと規定したのであるか。一念三千說の文はなるほど摩訶止觀の獨說である。しかしそれだからと云つて、一念三千が不思議境の唯一の內容規定であるとか、またこれが他の講說には見られぬ全く特異の思想であるといふ見解は、特別の新しい宗學上の立場からはともかくとして、一般的立場からは再考慮の餘地がある。

かくて次に一念三千の文よりも一念三千の思想、すなはち義の面から考察する必要を生ずる。そして此の場合は天台大師の